

## JICA 筑波野菜研修

### 今年の研修を終えて

国際耕種は、国内事業として長年 JICA 筑波の野菜研修を運営している。去る 10 月 10 日に今年の国内研修の閉講式が執り行われた。帰国後のフォローアップとして約 1 か月間の遠隔指導が残るものの、無事日本での研修を終え、指導に当たった五百木、苗代は安堵しているところである。JICA の農業支援の軸がアフリカに傾いている昨今にあって、この研修はアジアからの研修員が主体となっており、情緒的にも日本人には親しみ易い。一方で、求められる技術レベルも高いため、我々も日々研鑽を積みつつ、講義ではフラットな意見交換を心掛けている。2 月末から 8 か月と長丁場の研修で参加者は、学習のみならず日本の社会・文化の規律や心遣いを感じ取り、生涯忘れえぬ深い日本の印象を持って帰路に着いたものと思う。



スマートフォンが世界中に普及した現在、帰国後の彼らのネットワークが拡大して各国の農業発展と日本との関係が強化されることであろう。業務では Zoom 会議や Workspace などの利用が日常となり、遠隔地間や国境を越えた交信やネットワーク形成が容易になった。この研修でもコロナ禍を経て 2023 年から来日前後に遠隔研修期間を取り入れ、日本での研修へのスムーズな導入と帰国後のフォローアップの充実に活用している。今年は、研修後期に OB 研修員と現研修員とを Zoom で繋いで、アクションプラン作成についての意見交換セッションを試みた。アクションプランは、研修の大枠の設計として、帰国した研修員が研修成果を活用して現地の野菜生産改善の行動を計画・実施することとしている。しかし、実施可能なプランのイメージがつかみにくく、過大、壮大な内容になりがちである。現職に復帰した彼らにとって負担にならず、職務の一部として実施でき

る内容が求められる。今回の Zoom セッションでは、OB 研修員からの助言により、現研修員の疑問もある程度解消され、有意義な意見交換のうちに閉会した。

8 か月間の研修は、JICA 研修の中でも最も長い部類で、いかに学習意欲を維持させるかが重



要になる。研修は、主要野菜の播種から収穫までの栽培実験・実習だけではなく、個別実験、採種・堆肥・接木・鮮度保持・直売などの実習や農業経営、農業普及、マーケティングに及ぶ。毎年、研修員から「多様でありながら内容がタフな集中特訓だった」と評されている。中弛みの暇もない詰め込み教育とも言えるが、指導者としては本望である。このような多忙な日々との引き換えに毎月 3 日程度の農家・生産法人・農協・普及所などの見学や 2 カ月に 1 度の 1～4 泊の視察旅行を組み込んでいる。「百聞は一見に如かず」生産現場、事業現場の実情を見学することにより、格段に理解が促進される。このような外出は、JICA 施設での閉塞的な日常から離れ、リフレッシュする貴重な機会にもなっている。研修後半になると研修員が、翌月の日程表に視察旅行がないかワクワクして見入る姿が恒例となっている。指導する我々も、有意義かつ思い出深い視察旅行となるよう企画に手を抜かない。

今後も対象国から若く有能な研修員がこの研修に参加し、学び取った幅広い知見を基に現地の農業の近代化にリーダーシップを発揮してくれるものと期待している。そして 20 年後には高官となって再来日してくれることを切に願う。

